



## Oshita Tojiro : The Pioneer of Japanese Watercolor Painting Commemorating the 150th Anniversary of the Meiji Restoration



① 《檜原湖の秋》1907年 水彩、紙 島根県立石見美術館蔵

明治150年記念



島根県立石見美術館コレクション

## 水彩画家・大下藤次郎展

2018年2月10日(土) - 3月25日(日)

記者向け  
内覧会  
のご案内

● 2月9日(金) 14時から(受付: 13時45分より)

● プレス関係者を対象に内覧会を実施いたします。  
● ぜひ、この機会を利用してご取材いただき、大下藤次郎展の魅力を発信  
● していただきますようお願い申し上げます。



② 《秋の雲》1904年 水彩、紙 島根県立石見美術館蔵



③ 《穂高山の残雪》1907年頃 水彩、紙 島根県立石見美術館蔵

## 明治 150 年記念 水彩画家・大下藤次郎展

2018 年 2 月 10 日 (土) ~ 3 月 25 日 (日)

### ● はじめに

水彩画は、西洋に由来する絵画技法のひとつです。日本には、幕末から明治の開国を経て本格的に持ち込まれるようになりました。その後、学校教育に取り入れられたこともあって、現在では多くの人が実際に手がけたことがある、身近な絵画技法となっています。

身近な技法となった要因は、絵具を水で溶けばすぐに描ける上にすぐ乾く、また道具も簡便で済むという技法の手軽さです。それゆえに、油彩で完成作を描く前の下絵やスケッチに用いられることも多く、構想を練るための補助的な技法であるという印象を持たれることもあります。

しかしながら、透明感のある美しい発色や、にじみやぼかしによるみずみずしい表現は、水彩画特有のものであります。また対象を即興的に写し取ることで生まれる軽やかなリズムもその特徴でしょう。合わせて、技法の手軽さから屋外での制作に適していることも特筆されます。

この水彩画に魅せられ、明治時代中期から後期にかけて、日本における発展に尽力したのが大下藤次郎（おおしたとうじろう／1870～1911）です。大下は水彩画を専門とする画家がほとんどいなかった時代にその世界に飛び込み、作品制作と普及活動を通して、わずか 20 年ほどの期間で、水彩画を日本全国へと広めました。



5 《多摩川畔》1907 年 水彩、紙 島根県立石見美術館蔵



4 水彩紙 《越ヶ谷の春》1897 年 島根県立石見美術館蔵

本展では、日本における水彩画の開拓者であり伝道者ともいえる大下の画業を、魅力的な水彩画作品約 120 点と関連資料によりご紹介いたします。2018（平成 30）年は、明治維新から 150 年を迎える年であり、まさに明治時代を生きた大下の画業を通して、その時代の日本に思いを馳せる機会ともなるでしょう。

なお本展は、大下の著作に序文を執筆したり、本人をモデルとした小説を発表したりするなど、大下と交流の深かった森鷗外の出身地である島根県西部、石見地域に立地し、「森鷗外ゆかりの美術家の作品」を収集する島根県立石見美術館の特別なご協力により実施するものです。

いわみ  
島根県立石見美術館

2005（平成 17）年、島根県西部の益田市に開館。同地は、森鷗外の出身地であることから、「森鷗外ゆかりの美術家の作品」をテーマのひとつとして、収集や展示活動を行っている。大下藤次郎は、森鷗外とも交流が深かったことから、その作品と資料 400 点あまりが同館に収蔵された。当館とは、2006（平成 18）年に「森鷗外と美術」展を共同開催した。

### 開催概要

主催・会場 和歌山県立近代美術館  
特別協力 島根県立石見美術館  
会期 2018 年 2 月 10 日（土）～ 3 月 25 日（日）  
開館時間 9 時 30 分～17 時（入場は 16 時 30 分まで）  
休館日 月曜日（ただし 2 月 12 日は開館し、2 月 13 日が休館）  
観覧料 一般 700（560）円、大学生 400（320）円

\*（ ）内は 20 名以上の団体料金

\* 高校生以下、65 歳以上、障害者、県内に在学中の外国人留学生は無料

\* 毎月第 4 土曜日（2 月 24 日、3 月 24 日）は「紀陽文化財団の日」として大学生無料

掲載用画像については、広報担当にお問合せ下さい。

文字のせ、トリミング等をご遠慮ください。

## 展示構成

### 1. 水彩画家を志す 1891～1898



6 《富士を望む》1897年 水彩、紙 島根県立石見美術館蔵

大下藤次郎は、1870(明治3)年、東京の商家に生まれました。家業を継ぐことを期待されながらも画家を志す気持ちは抑えられず、1891(明治24)年、満21歳の時に、その道へと進みます。

大下が学ぶことを選んだのは、西洋からもたらされた新しい絵画でした。大下は洋画家の中丸精十郎(1840-1895)に師事し、技法を学びはじめます。学習は鉛筆で対象を描くことから始まり、水彩や油彩へと段階的に絵具の使用へ進んでいきました。油彩による作品は現在1点しか確認されていませんが、中丸に代わって師事した、ドイツ留学経験のある原田直次郎(1863-1899)の影響を感じさせます。

洋画家の多くは、そのまま油彩による制作を中心としていきますが、大下の場合は違いました。大下は水彩画への関心を深め、1895(明治28)年には、水彩画を

制作の中心とすることを決意します。大下は、もともと絵画学習の一環であった風景を写しとる写生という行為に、当初から強く惹かれたようです。写生を重ねる中で、風景画制作を主体とする画家としてのあり方が固まったとも考えられます。

水彩画を専らとしたのは、その手軽さと即応性が、出会った風景と向き合う時に、最適な技法であったからでした。各地を旅し、そこで見つけた風景を画面におさめる水彩画家・大下藤次郎の活動がここにはじまりました。

初期の作品は、風景が主体であるとはいえ人物を配して風俗的な要素を盛り込んだ画面構成や、道の左右に建物を配して奥行きを持たせた構図などが特徴的です。これらは、明治初中期に日本の洋画家たちが手がけていた作風と共通します。大下は自らも活動に参加した、日本初の洋画家たちによる団体、明治美術会の展覧会にも、そういった水彩画作品を出品しました。



7 《日光》1897年 水彩、紙 島根県立石見美術館蔵

### 2. 南海への旅 1898

水彩画家として身を立てることを決意した大下ですが、1893(明治26)年に父が没した後、家業や家庭の問題でしばらく悩みを抱えます。しかし、1896(明治29)年、家業も邸宅もすべてを手放すことで整理をつけ、絵画に専念する環境を整えました。

同時代の画家の多くが希望したように、大下も欧米への留学を考えていました。経済上の理由もあってなかなか実現できませんでしたが、1898(明治31)年、大下は海外渡航の機会をつかみます。海軍の軍艦「金剛」が、南太平洋を巡る訓練航海を行うに際し、明治美術会からの特派員という立場で、同乗する許可を得ることができたのです。

航海は同年3月に横須賀を出て、オーストラリアに向かって南下、ブリスベン、シドニー、メルボルンに寄港したのち、北上してフィジーに立ち寄り帰国するという6か月にわたる行程でした。結果としてこの南半球への航海は、大下の水彩画家としての道を開く意義深い旅となります。まず日本を離れ、広大な海と空に囲まれた船上での生活は、家庭問題で受けた精神的な苦痛からの回復を促し、大下を心機一転させました。乗組員たちとの楽しい船上生活が、スケッチに残されています。

また日本の内地では見ることができない、海や大気、雲や太陽が織りなす壮大な風景は、大下の自然に対する考え方に変化をもたらし、風景のとらえ方にも影響を与えました。さらにシドニーやメルボルンなど、上陸した寄港地で見た西洋文化により形作られた風景は、自分が描いてきた日本の風景を改めて見つめ直す新鮮な刺激も与えたことでしょう。



8 《赤道直下にて》1898年 水彩、紙 島根県立石見美術館蔵



9 《メルボルン港》1898年 水彩、紙 島根県立石見美術館蔵

### 3. 日本の風景をみつめる 1898～1906

南洋からの帰国後、大下の人生は順調に動き出します。私生活では、1899(明治32)年、満29歳を目前に結婚すると、関口駒井町(現文京区関口)に新宅を建て妻と暮らしはじめます。翌年には長男が生まれました。しかし生活と制作の拠点はすぐに東京郊外の青梅に移します。近辺に写生に適した風景が多く、研究を深めることができる場所であると判断したためでした。



10 《秋の漁村》1905年 水彩、紙 島根県立石見美術館蔵

画家としては東京近郊を中心に、時に泊まりがけで写生に出かけながら、アトリエでの制作も続けます。明治美術会やそれが改組した太平洋画会に出品するなど、盛んな発表活動も行いました。作風にも変化が現れ、初期の作品に見られた、いかにも場面を作ったかのよ様な硬さは薄れていきます。水や雲、大気などが見せる自然の変化にまで注意を向け、その動きまでもとりこんだかのような、やわらかな表現が実現されるようになりました。

また自らの制作とともに、大下が力を注いだのが水彩画の普及活動でした。1901(明治34)年に刊行した水彩画の技法書『水彩画の葉』は、年内だけで6版の増刷を重ね、2万部が売れたといえます。それもあってか1902(明治35)年から翌年にかけて念願だった欧米歴訪の旅に出ることができました。

『水彩画の葉』の刊行以降、ブームの兆しを感じた大下は、水彩画をより発展、普及させるための拠点として春鳥会という組織を作り、その活動を活発化させます。まず、細かな情報提供や愛好者との交流の場を作るべく、1905(明治38)年に水彩画の専門雑誌『みづゑ』の刊行をはじめました。また翌年には、直接技法を教える場となる水彩画講習所を、丸山晚霞(1867-1942)、真野紀太郎(1871-1958)とともに神田三崎町の学校を間借りして開設しました。



⑪ 《青梅》1904年 水彩、紙  
島根県立石見美術館蔵

#### 4. 水彩画の可能性を求めて 1907~1911

1907(明治40)年、第1回文部省美術展覧会(文展)が開催されます。最初の官設公募展覧会である同展は、画家たちにとって重要な作品発表の場でした。大下も《穂高山の麓》(東京国立近代美術館蔵)を出品します。この作品は特別にサイズが大きく、緻密な描き込みからも、大下が文展出品に強い意欲を持っていたことを想像させます。大下は、水彩でも十分な迫力と力強さを備えた表現が実現できることを、作品を通して示してみせようとしたのです。この年、大下は水彩表現の可能性に挑戦するかのよう、同様の大画面を用いた制作に取り組みました。

同時に大下は普及活動にも新たな展開をみせます。学校を間借りして開いていた水彩画講習所を閉じ、1907(明治40)年には新たに取得した土地に建物を新築、日本水彩画会研究所を立ち上げます。これにより講習が常時行えることとなり、合わせて活動組織名も日本水彩画会としました。また前年8月に合宿形式で水彩画を教える講習会を青梅で開催すると、その地方開催をこの年から開始します。大阪、福井、島根など、各地の熱心な愛好者の指導のため、夏期に開催する講習会は恒例となりました。

創刊以来『みづゑ』の編集は毎月の仕事であり、大下は編集者、執筆者、また講師として多忙な日々を送ります。しかし、制作者としての活動は止めず、大下は各地方への写生旅行に精力的に出かけ、実制作も充実させました。熟練した技術は、山や海、湖や森など、自らが見出した自然の美を生き生きと画面に表すことを可能にし、毎年、その成果は太平洋画会展覧会でも発表されます。しかし、1911(明治44)年10月、活動の全盛期ともいえるさなか、大下は病気のため急逝します。満41歳の若さでした。まさに明治時代を生きた人生は、短くとも多くの人に絵を描くことの喜びを伝える意義深いものでした。



⑫ 《穴道湖の黄昏》1911年 水彩、紙  
島根県立石見美術館蔵

### 関連事業

- 講演会「明治水彩画をプロデュース、大下藤次郎の多才」  
【日時】2月10日(土) 14時から、2階ホールにて(13時30分開場/聴講無料、先着順・定員120名)  
【講師】川西由里氏(島根県立石見美術館専門学芸員)
- フロアレクチャー(学芸員による展示解説)  
【日時】2月12日(月・祝)、3月4日(日) いずれも14時から、展示室にて(要観覧券)
- こども美術館部「たびたび旅に出るたび」(隔月開催の小学生対象鑑賞会)  
【日時】2月24日(土) 14時から(開始時間までに受付にて要参加登録、参加無料・同伴される保護者は要観覧券)

#### 【同時期開催】

コレクション展 2018-冬春

特集展示 はじまりの景色

【会期】開催中～4月15日(日)

【会場】1階展示室

#### 和歌山県立近代美術館

学芸担当：宮本 広報担当：島

〒640-8137 和歌山市吹上 1-4-14

TEL 073-436-8690 (代表)

FAX 073-436-1337

E-MAIL moma\_w@future.ocn.ne.jp

WEB <http://www.momaw.jp/>